



# 留年奇譚



雜把

「待ち合わせは七時です。国鉄高田馬場駅の改札にしましょう。早稲田口ですよ。分かりませんか。いいですか」

唐突に、旧師の松奇先生から電話をもらい、話すうちにどういう経緯か、一度一緒に飲まなければいけませんね、そう上から物を云われたのです。

自分は気乗りがせず、しばらく生返事をしていました。それでも先生はうわ言みたいに、飲まなければいけませんよ君い。そうでござんしょ、考えてもごらんなさい。いけませんよ、飲まねば。

執拗でした。こちらが承知するまで、云い止む気配がありませんでした。いつも恬淡とした印象の先生とは、別人のようでした。加齢のせいで、障害がある性格が表立ってきたのでしょうか。

ここで、無碍に断ったら……、急に薄っ気味が悪くなって、不意に祟られそうな怖気が走り、つい約束を取り付けてしまいました。

松奇先生は高校時代の担任で、化学の教師であった人です。だからといって、化学者であったか否かは知りません。ただ校内では、専ら白衣で通しており、ほかの恰好での師に、お目にかかった覚えはありません。

やはり、待ち合わせ場所でも、小柄で試験管のごとき瘦身に白衣を引っかけ、黴臭い煤けた群衆の往来する中、煙草を吹かしながら、改札脇に超然と佇んでいました。相変わらず、紫煙を真直ぐ吹き付けるでなく、ぼかぼかと焚くように吹かします。葉巻式とでもいいのでしょうか。

硬い縮れた癖っ毛の頭髪。そのせいか、皺深く細長い顔は、老黒人じみえています。

「先生。お待たせしましたか」

私が会釈すると、

「安西君。よく来たね」

先生は自分でしつこく誘っておきながら、どこか意外そうな声色でそう云いました。よく来たもんだね、とそんな含みさえ感じました。

四十年前の私は、先生のお荷物生徒でした。問題ある劣等生を、担任として預かることが、先生にすればインケツ至極であったことと想像できます。

「とにかく、行きましょう」

私はそう云う先生の言葉に付いて、電車に乗り込みました。

車内は帰宅ラッシュで満杯でしたが、先生は人の波に溺れながらも、煙草を吸い続けました。しかし、誰ひとり注意するでなく、また気にする風情もありません。考えれば、ひと昔前の日本では、食卓や映画上映中でも、みな当たり前に喫煙していたものだと思い起こしました。

小柄な先生は人波の底のほうで、呼び鈴ほどの大きさに縮まったように見えました。

「君。確か、麻雀が得意ですね」

そんな先生の声が、気持ち甲高く聞こえます。

「得意というか、好きでしたね」

「でした、って過去形なのかね」

「このところご無沙汰です」

「でも、儲かるんでしょ、麻雀は。こんど教えてくれないかね」

「そりゃ勝てば儲かりますが、負ければ損です」

「損する時もあるのかね」

「ええ。賭け事ですから」

「ああ。そうなのかい」

先生が、心底がっかりした声で云いました。

「ああ。そうなのかい」

もう一度、消え入りそうな声を出しました。

程なく或る駅でいったん下車して、山手線の隣ホームに乗り入れている、私鉄線に乗り換えるよう促されました。

車体がうずら豆色で、寸の短い三両編成の私鉄電車が停車中でした。在来線のように、席が向き合うボックスシートになっていました。

乗客はまばらでした。赤ん坊を抱いた母親。詰襟の学ランを着た高校生。黒いギターケースを抱えた長髪の若者。大きな風呂敷包みを傍らに置く行商人らしき婆さん。普段着の老人などが、所在無げに座席に座っており、勤め人の姿はついぞ見かけませんでした。

「ずいぶんと、空いてますね」

私が、先生と向い合せに腰かけて云いました。

「この線は初めて乗りました」

進行方向すら分かりません。

「在の方へ行くんですよ」

先生が答えました。

床は黒光りした板張りで、艶出し塗料のせいか目が沁みます。

ぷあああ、という生あくびのごときクラクションが踏まれ、がたごと車両が動き出しました。

私は進行方向を背にした席で、先生は進行方向を前に見た上席で、安心しました。

「今夜のお目当ては、どちらですか」

私は先生に問いました。

「むかし、花街だったところです。まだ往時の面影が、多少残っています」

先生は白衣のポケットから、カップ酒を取り出しました。ぎりぎり蓋を開けてひと息飲みまして、

「石畳小路に、小料理屋、鮎屋、おでん屋なんぞがズラッと軒を並べてましてね。ぽつんと氷や灯油を卸す店なんかがある。ねえ？ 道は城下町みたいに入り組んで、突然坂が現れたりする。どっからか、三味の音が風に乗ってくる。わずかだが、まだ芸妓さんなんかもいる。ええ、どうだい。花街が隆盛なりし頃の、粋筋の意匠を施した建物が、闇にぽっと浮かび上がる、ってなもんだ。ええ？」

名調子でトントンと語ると、コップ酒を一気に干してしまいました。

車外の街並みも本格的に暗さを増してきます。

私は、先刻から煙草を吸いたい衝動を、身内のどこかで自制しています。高校生時分から、一端に喫煙は常習でしたが、未だに先生と相對して堂々と一服するのは、どこか氣後れするようです。

「ひとり宴会はいけませんね。君も一杯飲みなさい」

先生は、私の膝の上に、新しいコップ酒と、袋入りの酢漬けいかを載せました。そうして、啜え煙草のまま腰を浮かせ、車窓の両端のツマミを握って引き上げ、窓半分を開け放ちました。ぎゅっとツマミを握る指の、垢まみれで鼠色の爪先が、長く伸びて震えていました。

むわっとする夏のような草いきれが、車内に流れ込んできました。

会話は途切れがちで、氣詰まりな霧囿気の中、私はやはり来たことを後悔し始めました。

「兎も角も」

先生が、ぼそっと呟いたとき、私の背もたれの裏側にいる赤ん坊が、ぎゅっと泣きました。

「こうしていると、呑気に旅行でもしているように、見えますかね」

そう言葉を継ぎました。

「この電車は、どんどん駅をはしよりますね」

私は発車から、まだ一度も停車していないことに気づきました。

先生は寸時、窓の外を見やり、

「ちいさな駅は停まらない。人生、またかくの如し」

自分の云った言葉に受けて、げらげら笑いました。赤い月のような口から、短くなった煙草を、素早い所作で電車の窓から、外へ抛り捨てました。煙草はまるでねずみ花火の勢いで、暗がりを飛んでいきました。

「しかし、君の中学時代の成績で、うちの高校が、よくぞ受かりましたね」

急に思い出したふうに、先生がどきりとする事を呟きます。口元には、手品よろしく、新しく火の点いた煙草がいつの間にかぷらぷらしています。

「自分でもそう思います」

私の卒業した中学でも、当時、ひどい内申にかかわらず、優秀な高校に合格した生徒がいる、ということで小さな話題になったものです。

「まぐれ当たりって、あるからね」

と、先生。

しばらく間があって、

「実力じゃなくて、まぐれで受かったんだろうね。君の場合」

私は、一瞬頭の芯がかっとしましたが、押し黙っていました。さらに、先生は、

「入学は、遠慮すべきだったんじゃないのかい」

私は先生の言葉に、目をそむけました。

「本来は、辞退すべきじゃないか。人間として」

踏切がぎんぎんとなけたたましい音で迫り、ぎんぎんとなつと一瞬で、後方へ吹っ飛びました

。電車がトンネルに吸い込まれました。機械音が反響して、先生の声も切れ切れになります。そっと私の高校入試の合格発表の掲示板を見に行き、少なからず喜んだという父のことが、頭をよぎりました。

私の背もたれを、件の赤ん坊なのか、どどんどどんと盛んに蹴飛ばしてくるのが響きます。

「さくら伐る馬鹿 梅伐らぬ馬鹿、と云いますね」

トンネル内では、先生の声が、異様に大きく、また小さくなります。

「それは、どういう」

ようやく私は、かすれ声を発しました。

「君は馬鹿だ、という有名なことわざですよ」

そう云って、先生は呵々大笑されました。ようやく云った、という晴れやかな表情になり、続けて、

「進級が危ないんだよ。君は」

節くれだった人差し指を、此方に突き付けました。

私は、冷や水を浴びせられたようでした。この男は狂っている。何十年前の話をしているのだ。まるで現在の時制のように。

「先生は今年でお幾つになられましたか」

私は、時の流れを自覚してもらうつもりで、そう訊きました。

「生きていれば九十ですよ。生きていれば」

背もたれを赤ん坊が、さらに激しくどどんどどんと蹴飛ばします。その振動なのか自分の心臓が大きく打っているのか、判然としません。眼圧が著しく上昇します。

「わ、私には、もはや仕事や家庭があり。お分かりですよ」

私は先生の思い違いを正そうとしますが、どこかで自分自身が怪しくなります。

「君ねえ。学校出ないで働いてる人なんざ、ごまんといますよ」

のらりくらりと、話の筋が食い違っていきます。

トンネルは地形に沿って、緩やかにフックやスライスのラインを縫っており、時折り、制動をかける金属音と、鉄同士が擦れ合った臭いが、むっと鼻を突きます。

「もう帰りたい心でいっぱいです」

私は、矢も盾もたまらず、白旗を揚げました。

「好きに帰ればいい。学校じゃないんだ、ここは」

と、先生はそっぽを向きました。

ああ、少しは正気なのかと思いきや、先生の口元の煙草が、火の点いたまま私の顔に飛んできて当たりました。

「野良犬め。ほうき星め。昨日の骸骨め。淫売の啖呵売め。花束バツタめ。桃色の愛校心め。高邁なる痰壺め。必ず留年させてやる。そう云ってるんだ。俺が」

先生が自身の入れ歯をカスタネットに、激しくフラメンコを踊り始めました。